

Concert Reviews

田崎悦子 P

6夜からなる「田崎悦子ピアノ大全集」の第4夜。「ピアノの詩人達」と題された当夜のリサイタル前半はシヨパン。使用楽器は1925年製NYスタインウェイCD-1135。「フクターン」は2曲ともに嬰八短調楽器の持つ素朴な響きに田崎はそつと耳を傾け、哀愁に満ちた旋律に身を委ねていく。「マズルカ」からは6曲が披露されたが、ここでも5曲が短調である。切々と奏でられる旋律、それを支える力強い生の鼓動を滲せた鋭敏なリズム、ことに和音の微妙な変化を大胆に示し、切なくなるほどのノスタルジーや時には抑えがたい情熱を含ませ、彼女の音言語で語る濃密なマズルカであった。(幻想ホ

ロネーズ)では、序奏においてアルペッジョを眩い光を纏めながらゆっくりと立ち昇らせてゆく。鮮烈な打鍵から放たれた響きは、幻夢の音の霧を成す。

後半はリスト「ピアノ・ソナタ」。恐ろしいほどの静寂と凄まじい勢いで轟く強音、温もりで満ちたピアノ

ドのような音色と人生の峻厳さを刻印するかのような激しいリズム……様々な対比が、作品に実に多様で変化に富んだ立体感を創り上げていた。研ぎ澄まされた感性を通して独自の音楽の色を自在に彰ることのできる数少ないピアニスト。5月23日・東京文化会館(小)

● 道下京子